

## 「私たちの宗祖親鸞聖人」

お話 玉光順正さん

卵を壁にぶつけると卵がこわれる。自分の立場を常に卵の位置におく。いつでも、たとえ壁がただしくても卵の立場に立つ、という風に村上春樹は言い切るんですね。壁とは力の強い方、体制の側、と言いますか、卵は力の弱いもの。勝ち組負け組と言いますが、私たちは常に壁の、強い方に立ちたがるんですね。

勝ち組に立ちたがるんですね。権力とか体制とかでなくても、やっぱり勝ちたいということがある。じゃあ親鸞という人はどうだったのということを考えた時に、親鸞のお手紙を読んでみると明らかに卵の側にたったとしかいいようがないんですが、そういうことがわかるんです。『これは一つ、後世のことは善き人も悪しき人も同じように助かるべき道』と法然上人に会った時のことをおっしゃっています。念仏というのは人と人を水平に配置する原理、運動。お金をたくさん持っていて寺を建てたり、戒を守る能力のある人だけが助かるなら、そういう人は少ないですね。少数のものが助かって大多数が助からないとか、エリートだけが助かるのか言うことではおかしい。そうではなくて、多数のものが助かるものを求めたときに、易行としての念仏を法然はあきらかにしたんですね。

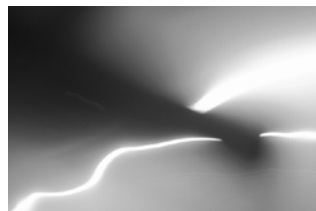
村上春樹が、もし小説家が壁の側に立つ小説を世に送り出したとすれば、その作品にはどんな価値があるのかとっている。これは私が話をする場合でも同じことで、壁の側に立って話をしたらそれは何の意味があるのかとね。これは誰でもそうなんだけれども、とてもきびしいところです。

村上春樹のお父さんは坊さんをしとった人ですね。『私の父は昨年90才で亡くなりました。教師を引退してたまに僧侶の仕事をしていました。父は京都の大学院で学んでいたとき、戦うために徴兵され中国に派遣されました。私自身は戦後生まれですが子どもの頃、父が毎朝食事の前に自宅の小さ

な仏壇の前で深い祈りを捧げているのを見て育ちました。一度父に聞いたことがあります。なぜ祈るのか。すると父は言いました。敵味方に関係なく、戦争で命を失った人たちのために祈っているのだと。』卵の側に立つという姿勢を親鸞の言葉からも教えられるわけです。いしかわらつぶてのごとくなるわれらということをも今の言葉で言えば卵のがわにたつということなんでしょう。

さて最後に自分ということなんですが、親鸞は流罪の時に、それ以後非僧非俗を名告った。僧に非(あら)ず俗に非ずということなんですがね。これは私はひとりになるということだとずっと考えておるんです。親鸞は罪人として裁かれて、お前は遠流の刑に処すと言われたんですね。その時の感覚というのはどういうものなんだろうかと思うんです。今の時代でも裁判にかけられて、何年の刑に処すと言われればやっぱりね、ひとりになると感じざるをえないでしょうね。そのときそれをどう受けとめるかという問題があるのです。

親鸞の受け止め方というのはひとりになって、ひとりから始めたということがあると思うんです。実は浄土真宗というのは決して最初からみんなで作ったということはないんです。親鸞が越後へながされて、それから始まって、今世界中に浄土真宗があるんです。これは考えたらすごいことだと私は思うておるんです。親鸞は遠流以降色々な書かれたものに名前が出てこない。…略…そのひとりから始まった浄土真宗。親鸞の名告は非僧非俗。そしてもう一つは地獄へ落ちて後悔しないということは、法然上人から念仏を聞いた覚悟ですね。この地獄とは「我今帰るところなき、孤独にして同伴者なし」それが地獄ということの意味です。帰るところがない、たとえばネットカフェとかそういう形で生きておる人たちがいっぱいおる。そういう人に親鸞の地獄へ落ちて後悔しないという教えが伝わるかどうか・・・！



750回御遠忌に私たちが親鸞上人の教えをどう伝えるかが課題です。

(つづく)